

交流会3 「実習現場の環境整備 -他施設から学ぶ人材・設備・時間・情報確保のあれこれ-

実習現場の環境整備

Environmental Considerations in Our Facility to Accept the Practical Education of Nursing Students.

水岡 昌子

Akiko Mizuoka

当院は、悩める病人のための病院たらんという基本理念のもと、1992年4月1日に創立された。兵庫県神戸市東灘区にあり、思いやりの精神を大切にす急性期病院として地域に根差した医療の提供を目指している。

当院の実習受け入れ状況は、H28年度は計7校の大学から実習生を受け入れており、実習生数は165名(のべ実習生数は1310名)であった。実習内容は、基礎看護学・成人看護学・小児看護学など多岐に渡り、H29年度より母性看護学実習も受け入れを開始した。

当院の実習受け入れ体制として、年に3~4回程度各階の臨地実習指導者が集まり、臨地実習指導者会を行っている。臨地実習指導者会では、年間の実習受け入れ状況を確認したり、他病棟で困っていることや工夫していることを共有している。年度末には1年間の実習状況を振り返り、次年度の課題を明確にすることでより良い実習環境が整えられるようにしている。また、初めて受け入れる大学に対しては、大学教員に対して病院のオリエンテーションを実施して、病院の特徴や方針などを知ってもらうようにしている。その後、病棟のオリエンテーションを実施し、病棟の特徴・1日の流れ・注意事項などを理解してもらうことで、臨地実習指導者などがケアと一緒に入れないときも安心して大学教員に任せられるようにしている。さらに、大学教員と実習内容や目標などの打ち合わせをして、大学教員と臨地実習指導者が同じ目標を持って学生指導が

できるようにしている。私は、お互いに何を求めているのか、どうしてほしいのかを事前にすり合わせておくことで、指導内容を統一することができ、実習生も混乱することなく実習に取り組めると考えている。

次に、現在私が所属している病棟の特徴を述べる。私が所属している病棟は小児内科を中心とする小児科急性期病棟であり、小児管理加算3を取得している。生後1日目から15歳以下を入院対象としており、耳鼻科や整形外科、形成外科などの手術目的で入院する患児も多い。平均在院日数は7日程度で、入退院が多いことも自部署の特徴である。H28年度は、2校の大学から実習生を受け入れ、実習生数は16名(のべ実習生数は102名)であった。そして、H29年度より新たに1校から実習生を受け入れている。

以上で述べてきた自部署の特徴を踏まえて、以下に実習で工夫していることを述べる。まずは、実習に必要なバイタルサイン測定の商品や、遊びやプレパレーション、指導の媒体作りで使用する折り紙や画用紙・マジックなどは大学から持参してもらっている。気管支の模型や、吸入器のデモ器などは当院で使用しているものを使うこともある。次に、私が患者選択の際に工夫していることは、できるだけいろいろな年齢や疾患の患児を受け持つてもらえるようにすることである。在院日数が短いため、実習中に1人の実習生が2名以上の患児を受け持つことが多い。小児の場合、年齢によって関わり方が大きく

変わってくるため、いろいろな年齢の患児を受け持つことで一つでも多くのことを学んでほしいと考えている。また、同じグループ内で受け持っていない年齢層の患児との関わりや学び、工夫した点を共有して学びを深められるようにしている。また、担当患者を決める際には人見知りの強い患児など、患児の負担になると考えられる場合や、できるだけそっとしておいてほしいといった家族は避けて、患児とその家族に負担がかからないように配慮している。

その他に実習で工夫していることは他部署・多職種・大学教員・病棟スタッフとの連携である。まずは、小児科外来との連携である。外来実習を通して外来看護の特徴や、外来看護師と病棟看護師の連携の大切さを学んでもらっている。実習中に担当した患児の退院後診察があるときには、その退院後診察に同席させてもらい、自宅での様子を聞かせてもらっている。その際に「実習生さんが作ってくれたパンフレットを見ながら吸入頑張っています。」という言葉ももらえたときは、実習生が「頑張ってくれました。」「嬉しかったです。」と良い笑顔を見せてくれ、一緒に喜ぶこともある。また、退院後診察に同席してその後の様子を聞くことで、実習生が行った退院指導などがどうだったのかなどの振り返りを深めることにも繋がっている。さらに、医師・薬剤師など多職種との連携も見学してもらい、チーム医療の大切さも学んでもらえるように意識している。

次に、大学教員との連携である。実習初日にはそれぞれの学生の特徴を教えてもらい、実習生の個別性に合わせてサポートできるように調整している。そこで、患児の状況と実習生の個別性を考慮しながら大学教員と目標を決め、その目標に向かって指導内容を統一している。そうすることで、実習生が混乱することなく、実習に集中できると考えている。そして、実習中に気になった言動や良かった点を共有し、次の指導へ繋げていけるようにしている。

最後に、病棟スタッフとの連携である。実習期間中はなるべく継続して実習担当できるように勤務を調整してもらっている。そうすることで、実習生の成長や課題を日々確認しながら指導できるだけでなく、私自身も成長過程を見ることができると指導のモチベーションアップに繋がっている。また、実習期間中は可能な限り実習担当のみにしてもらい、指導に集中できるようにしている。どうしても受け

持ちをしながら学生指導をすると、患児の事やナースコール対応を優先してしまい、十分な指導が行えず、実習生と一緒に考える時間も確保できなくなることが多い。私は実習生にしっかり考えてほしい、その考えに至るまでのプロセスも大切にしたいと考えている。そのため、指導に集中できる環境を整えられるということはとても重要だと感じる。一方で、受け持ちができる看護師が一人減る分、他の看護師への負担が増えることもあるが、その必要性を理解してもらうことで協力が得られている。ケアの調整としては、直接受け持ち看護師に声をかけたり、その日の担当が表示してあるホワイトボードに実施したいケアを書き込み、一つでも多くケアや検査などの見学・実施ができるようにしている。さらに、私が他の実習生とケアに入っているときには、その日の受け持ち看護師が実習生のサポートに入ることも多い。その際には、状況や指導した内容などを教えてもらい共有できるようにしている。また、私自身が休みや夜勤などで実習担当ができない日には、翌日に担当する指導者が困らないように目標や指導方針、状況などの引き継ぎをしっかりと行い、実習生や大学教員が混乱しないように気をつけている。

ここまでは、実習を受け入れるに当たっての工夫点や連携の重要性を述べてきたが、ここからは私自身が臨地実習指導者として大切にしていることを述べていきたいと思う。

まずは、実習生を理解するということである。最近の実習生の特徴として、考えることが苦手・コミュニケーションをとることが苦手・与えられることが当たり前、言われなければ大丈夫という傾向があると言われている。また、「親に言われたからとりあえず看護師になりました。」という新人看護師も増えてきているように感じる。そのような実習生に対して、臨地実習指導者としてどう関わっていけばいいのかわからないという意見もよく耳にする。しかし、「最近の若い子は・・・」とため息をついているだけでは、未来の良い看護師を増やしていくことはできない。そのため、どうしていけばいいのかを考えていく必要がある。私は、今の時代の特徴や価値観の変化を理解して、実習生の特徴や考えを受け入れることが必要だと考えている。その上で、個々の実習生の個別性に応じた指導方法を考えていくことが、今の時代の臨地実習指導者に求められていることであるとを感じる。

次に、私が臨地実習指導者として指導をする際に気をつけていることを5つ述べる。1つ目は、自分で考えてもらい、待っても自分の考えが出てこなければヒントを出すということである。これは「空白の原理」という考えからで、全て自分で考えさせようとするのではなく少しヒントを与えることも必要だということである。人間の脳は「全く分からない」ということに対してはシャッターを閉じて逃避し、それ以上知ろうとしない。しかし、「少し分からない」ということに対しては、その分からない部分を埋めようとする。まずは自分で考えてもらい、わからなくなったところで少しヒントを出すことで、頭の中を整理するのを手伝い、何を調べてきたらいいのか気づけるようにする。そうすることで、学習意欲を引き出していきたいと考えている。

2つ目はしっかり聴いてフィードバックすることである。最後まで学生の考えを聴き、「しっかり聴いてもらえた、わかってもらえた」と感じてもらうことで、学生が自分の考えを言いやすい環境を作れるようにしている。そうすることで、実習生がその考えに至ったプロセスを言語化できるようになるため、「あなたの考えはこうなんだね。じゃあこの患児の場合、こういった場合はどう？」と指導もしやすくなる。

3つ目は、できたことはしっかり褒めるということである。出来ているところや、頑張っているところをしっかりと褒めることで、次も頑張ろうという気持ちを引き出していきたいと考えている。しっかりと褒めるためには、実習生をよく観察する必要がある。ただ褒めるだけでなく、具体的にどこがどう良かったのかを褒めることで、モチベーションアップに繋げていきたい。

4つ目は、信頼関係を築くということである。前述した2つ目と3つ目をしっかり行うことで、実習生との間に信頼関係が生まれ、些細なことでも口に出せるようになる。その些細な気づきや情報の中に、次の看護展開に繋がる大切なことが隠れていることも多いため、そこを指摘することで看護展開や学びに繋げていきたいと考えている。

5つ目は、全部できる必要はない、まずは共同実施でも良いので積極的に実施するということである。「全部できないとだめ、100点の実施計画を立てて来ないとだめ」としてしまうと、少しでも不安要素があれば「見学します。」と実習生は消極的に

なってしまう。そうなれば、せっかくのチャンスを逃してしまうことになる。積極的に実施して、振り返って、次はこうしようとPDCAサイクルをしっかりと回すことで、できることを毎日少しずつでも増やして自信につなげていきたい。そして、患児とその家族が安心して実習生を受け入れることができ、実習生が積極的に実施できるようにサポートしていくことが、臨地実習指導者の役目であると考えている。

最後に、私の臨地実習指導者としての今後の課題は、今まで述べてきたことを確実に実施し、もっと個別性を意識した関わりをすることで積極性を引き出していくということである。ここまで私なりにいろいろな気をつけていることを述べてきたが、意識しているだけで100%は実施できていない。そのため、状況に左右されず安定して個別性合わせた指導ができるようにしていきたい。そうすることで、充実した実習だったと達成感を感じてもらえるようにしたい。さらに、実習の中で良い経験をする中で「やっぱり私看護師になりたい」と感じることであれば「親に言われたからなただけで、別に看護師したくありません。」という人を減らしていけるのではないかと考えている。また、実際に看護師になり壁にぶつかって辞めたいと思ったときに、その良い経験が壁を乗り越える力になってほしいと思う。そして、実習生との関わりを振り返ったり、院内外の臨地実習指導者や大学教員と情報交換をしたり、研修に参加することで、私自身も臨地実習指導者として成長していきたい。